

〈論 文〉

新敬語「ス」の使用場面の拡大と機能の変化

倉 持 益 子

キーワード：「ス」、敬意、親しさ、知性隠し、ポライトネス

はじめに

「これ、いいすね」等の若い男性が語末に多用する「ス」は以前からよく耳にする。しかも様々な所で使われているところからすると、これには何らかのコミュニケーション上の効果があるものと思われる。

本稿では、コミュニケーションストラテジーとしてこの表現の機能を探ってみた。その結果、この表現は、ポジティブポライトネスの機能とネガティブポライトネスの機能を併せ持つことがわかった。また、ブログでの新たな文体使用とあいさつ言葉での機能の変化を見出すことができた。

なお、この表現の表記は先行研究でも「(っ)す」や「ス」などまちまちであるが、本稿では字数、初期の資料^①での多用という理由から「ス」を採用した。

1. 先行研究

尾崎喜光（2002）は、職場会話のコーパス分析を通じ、職場での「ス」について、20代を中心とする若い男性の使用が目立つが、40代以降や女性も少数ながら使うことと報告している。また、同書において、その使用法としては、名詞・形容詞に「ス」を付けた形がほとんどであることから、動詞に接続する形は、後から適応されたと考察している。

中村桃子（2007）では、「ス」は、敬意を表しながらも相手との距離間を縮める表現として編み出されたとし、表現の短縮・軽量化が〔内容〕の短縮化（距離の短縮）につながったとしている。

両研究共、これが敬語表現であることを表明している。しかし、尾崎（2002）では対象とした場面を職場に限っているため、学生（特に体育系）が多用すると言われるこの表現の現状を十分表してはいない。また、中村（2007）も、この表現が中心の研究ではなかったためか、使用者や使用場面の分析が十分ではない。

2. 本稿の目的

本稿では、先行研究の「敬意表現である」という姿勢を受け継ぎ、中村の「新敬語」という位置づけを支持したうえで、この表現法の使用の広がりとポライトネス機能を明らかにすることを目的とした。この「使用の広がり」とは、この表現がいつどのように広がったかという時間的なもの、さらに使用場所、使用方法の変化等を含んだものとする。また、この表現には「敬意」「親しさ」を相手に示す要素が見出せるが、使い方でそのバランスがどう変わるのかを明らかにしたい。

3. 研究方法

時間的な変化は、文書資料及び40代以上への聞き取り調査によった⁽²⁾。現在の使用の広がりに関しては、若い年代も含めた聞き取り調査とテレビ番組での記録調査、ブログの収集、分析の他、2種類のアンケート調査による。

4. 1960～80年代の使用

4.1 60年代から80年代までの「ス」の概要

この表現が、「～デス」の変化したものであるということは、先行研究からも明らかである。しかし、いつごろ、何がきっかけでどこから出てきた表現かは明らかにされていない。

本研究で得た資料では、1966年朝日新聞連載の4コママンガ「フジ三太郎」が最も古い。次いで、サザエさんにも1967年から登場する。新聞の漫画に取り上げられるということは、1960年代後半（昭和40年代の始め頃）にはある程度広まっていたと考えられる。

60年代の両作品を見ると、どちらも比較的若い年代の社会人が目上の人に使っているが、70年代に入ると学生の使用が目立ってくるようである。本研究で行った聞き取り調査からも、50代以上の男性3人に聞いたところ、3人とも70年代にこの表現に接したと答えた。そのうち2人は、学生、それも運動部所属の大学生が使っていたのを覚えている。また、この3名はいずれも地方出身者で、東京で初めてこの表現と接したと語っている。

地方への広まりも明らかではないが、北海道札幌出身者は1981年、高校生だった頃、初めてのアルバイトでこの表現を知ったという。したがって、80年ごろにはすでに札幌の若者たちが使っていた可能性が高い。

4.2 70年代にこの表現に接した人への聞き取り調査から

現在の本研究の聞き取り調査では、マンガ以外に60年代に使った、聞いたという情報はない。最も古いものが70年代前半である。以下にその記録を載せる。

- i) 70年代の始め頃に「ス」に初めて接した男性（宮城県出身 50代半ば，職業不明）

35年前，東京に出てきたとき，語尾に「っす」を付ける人を見て珍しいと思った。その人は，熊谷の高校出身で野球部にいた。自分では使う気にならなかった。

- ii) 70年代半ば頃「ス」に初めて接した男性（長野県出身 70代前半，楽器製造）

「ス」は自分も日常的に使っている。店に来る若者たちに影響されたのだろう。この言葉を聞き始めたのは第二子誕生の70年代半ば（本人40歳頃）だった。印象として，こっちを立ててくれる気持ちのいい言い方で好ましく感じられ，違和感はなかった。どこか故郷の信州方言にも通じる心地よさがあった。使っているのは，運動部員が多かった。その後，大工さんや左官屋さんの若者など，学生以外も使っていたのに気が付いた。しかし，東大生は使わなかったようだ。

- iii) 70年代後半に初めて接した男性（小田原市出身 60代前半，俳優）

1977年ドラマに出演した役（とび職）の中では「そおっすねー」とか「そうじゃないっすよー」「いいっすかー」などというせりふが多かった。番組終了後もそのまま口癖になって現在でも使っているという。（マネージャーを通じての回答）

以上の3人のうち，2人が「ス」を好意的に受け止め，自ら使うようになったと言っている。また，80年代初めから使い始めたという40代男性（北海道出身，美容師）も，この表現には好意的で，現在もたびたび使っているという。

まだ少数を対象としたに過ぎないが，これら聞き取り調査の結果は，現在「ス」は，若者世代に留まらない使用年齢層の広がりがあることを示唆している。

4.3 考察：ボライトネスの視点から見た「ス」の機能

70年代に「ス」に接した人たちが言っているように，この表現は運動部系の学生が多用していた。また，アルバイトで覚えたという証言や，現在の大学生からの聞き取り調査からも，アルバイト先でもよく使われていることがわかる。ではなぜ運動部やアルバイト先なのであろうか。以下に考察を述べたい。

若いながらも知的な階層とみなされる大学生が，アルバイトという単純労働者になる時，彼らの知性はむしろ嫌味な印象をもたらす危険性がある。また，運動部にも「インテリ臭さ」はじゃまである。客，店主，先輩に嫌われぬようにするには，知性の象徴たる敬語をわざと崩して「知性を隠す」ことがストラテジーになる⁽³⁾。

これは「ス」を残すことで敬意は伝えている。さらに，崩した言葉でも受け入れてくれる関係であるということから「親しさ」も表すようになっていったと考えられる。アンケートの事前調査としての聞きこみで，学生たちも目上で親しさを感じる相手に使うと答えたものが多かった。

敬意を示した方が良い相手に働きかける際に，相手のフェイスを傷つけないように相手を高い位置に置き，自らを低い位置にすえるのは，Brown & Levinson (1987) のいうところのネガティブ

ポライトネスストラテジーに当たる⁽⁴⁾。また、積極的に親しさを表すのはポジティブポライトネスに当たる⁽⁵⁾。この「ス」には、両ポライトネスの機能が備わっていると考えられる。

5. 使用場面の拡大 その1（大学生の使用）

5.1 男女別及び品詞別の使用傾向

2008年6月から若者新表現に関するアンケート調査を行っている⁽⁶⁾。質問は、「自分も使う」「聞くことがある（自分は使わないが存在は認める）」「聞かない」の三択形式にした。その中から性別の明記があった85人の大学生を対象に男女別で集計をし、「ス」使用のグラフを作成した⁽⁷⁾。その結果、男子学生の77%が日常的に「ス」を使っているのに対し、女子学生は11%に留まった。したがって「ス」は、主に男性が使う言葉であると大学生に認識されているのがわかる。

また、図1から、よく使われるのは形容詞、次いで名詞、副詞等、元の形である「です」と接続しやすいものである。普段「です」と接続しない動詞は比較的使用されていない。

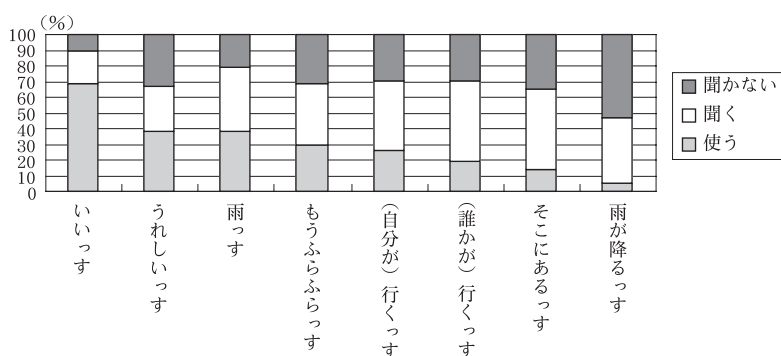


図1 男子学生「ス」使用

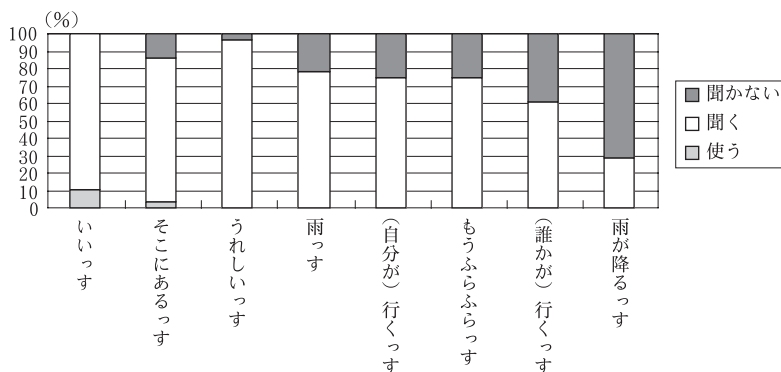


図2 女子学生「ス」使用

6. 使用場面の拡大その2（テレビにおける使用）

6.1 オリンピックのインタビューに現れた「ス」

本稿4.3で、「ス」は、「知性隠し」のストラテジーとして広まった可能性を示した。しかし、現在、それとは異なる使い方が見られるようになった。それは、自分の知性を隠すことを目的としておらず、相手へ親しさを示すという意図も薄い場合である。その代表例として、北京オリンピックでのメダル獲得が決まった直後のインタビューに答えた3選手の発言を紹介する。

「はい、うれしいっす」「ほんと、金メダル取れてよかったっす」「最高っすね」「優勝もできたので、本当満足っす」「明日も頑張りたいっす」（以上、北島康介）⁽⁸⁾

「これが自分色のメダルっすね」（松田丈志）⁽⁹⁾

「みんなのおかげっす」「オリンピックの畳はすべらなかつたっす。大丈夫っす」「勝ててよかったっす」「今、しばらく遊びたいっす」「練習したいっす」（以上、石井慧）⁽¹⁰⁾

ここでは、多少興奮気味とはいえ、日本全国に放送されることを意識したうえでの発言であることは間違いない。メダル獲得というのは、自分自身への「絶対的な肯定」が得られた時であるといってもいいだろう。その精神下では、ありのままの自分を見せたいという気持ちになるのではないか。「ス」は、運動部の人がよく使うと言われるとおり、スポーツクラブ系の位相と言ってもよい。すなわち、自分たちの位相ことばを、誇りとともに使ったと考えられる。

ちなみに、彼らのうち北島と松田は、スタジオに招かれてのインタビューでは、「ス」が減り「デス」が増えていた。これは、自分たちの属する集団言葉を使うより、普通の日本語を使うことで、喜びを国民と分かち合いたいという意識が働いたためかもしれない。

6.2 人気俳優リポーターが使う「ス」

開局記念のノンフィクション番組に若手俳優がリポーターとして起用されていた。彼は最初から最後まで「すごいっす！ これは！」などの「ス」を連発していた⁽¹¹⁾。これは、おそらく彼の日常的な話し方であると同時に制作者側の意図もあったと考えられる。すなわち、「ス」を使用することにより、視聴者に彼の「素」の部分に触れさせることができる。テレビ制作者は、視聴者に人気俳優が直接語りかけるイメージを使いたかったのではないか。そうは言っても、くだけた使い方によって、かえって視聴者の反感を買うこともある。それを「ス」は世間でかなり許容されているとの制作側の判断で、2時間にわたる「ス」レポートが許されたのであろう。これはこの番組に限らず、若い男性が出演する番組によくあることである。

7. 使用場面の拡大その3（ブログにおける使用）

ブログでも、かなり頻繁に「ス」という表現を目にする。しかし、使い方が口頭での使い方と差がある。例を紹介したい⁽¹²⁾。

例2 『パリパリの PARIS (パリっす)』【4日目】

パリといえばルーヴル美術館っすよね。友人の職場が近くなんでお昼を食べに行く約束してルーヴル近くを初めて一人で見て回ったっす。そして、パリの歩行者信号がイギリスや日本と違う事を発見したっす。歩行者信号は通常は縦に赤と青が並んでいるのに、フランスは横なんす。しかも止まっている歩行者のシルエットがどう見ても威張って立っているような感じでヒーロー登場って感じにも見えるっす。それから、公衆電話がオシャレなシースルーのガラス張りです。センスが良いなあと思ってしまったっす。

先行研究からも動詞＋スは少ないという報告がなされていたが、他のブログでも容易に「動詞＋ス」は見出せる。「ス」は「です」の変化したものであるため、本来「です」に接続できない動詞に使うことは、口頭においては不自然さを生じてしまう。しかし、ブログならば、その不自然さも個性に代えられるということなのかもしれない。

ブログでの機能を明らかにするため、文章の一部を①普通体、②です・ます体にしてみる。

A 普通体使用『パリパリの PARIS (パリだ)』【4日目】

パリといえばルーヴル美術館だよね。友人の職場が近くなんでお昼を食べに行く約束してルーヴル近くを初めて一人で見て回った。そして、パリの歩行者信号がイギリスや日本と違う事を発見した。

B です・ます体使用『パリパリの PARIS (パリです)』【4日目】

パリといえばルーヴル美術館ですよね。友人の職場が近くなんでお昼を食べに行く約束してルーヴル近くを初めて一人で見て回りました。そして、パリの歩行者信号がイギリスや日本と違う事を発見しました。

まず、Aの普通体文は、終助詞が皆無なら普通の日記と変わりない。また終助詞をつけると、読み手への意識は出るものの、少々なれなれしい印象を与える。次にBの丁寧体文であるが、これでは手紙そのものである。ブログという場特有のものを感じさせない。

ブログとは、ネット上で不特定多数の人に読んでもらうことを目的とした日記である。したがって、新しいコミュニケーションのための文体が求められる。ブログでの「ス」の多用（特に動詞において）は、以下のような効果をもたらすと考えられる。

1) 韻を踏むおもしろさ

文末のおよそ半分は動詞であろう。動詞をも「ス」にしてしまえば、全ての文末を「ス」

で統一することができる。それにより、リズム感とおもしろさが出てくる。

2) 相手との距離を保ちながら親しさを表す

普通体文は終助詞を使わないと無愛想になり、使うとなれなれしくなりやすい。それに対し、「ス」の文は元々敬意表現であるから、なれなれしくなるのを防いでくれる。また、崩した表現であるため、親しさを伝えることができる。

3) 新鮮さを与える

話し言葉でも「手紙」でもない新しい書きかたによって、新鮮な印象を与えることができる。

4) 仲間意識を高める

共通の文体を愛用する「ブログ仲間」としての意識を持つことができる。

以上のことから、ブログにおける「ス」を多用した新しい文体には、それが流行るだけの理由と効果があるといえる。

8. 機能の変化（あいさつ言葉への使用から）

近年、あいさつ言葉に「ス」を付けて使う傾向が出てきた。そこで、前出の共同研究「新表現調査」と、倉持の個人研究である「キャンパスあいさつ調査」⁽¹³⁾において、あいさつことばと「ス」の使い方と使用率を調査した。その結果、「ス」の新しい機能が見えてきた。

8.1 新表現調査から男女別使用

「新表現調査」の結果、男子学生の63%が何らかのあいさつ言葉に「ス」を付けているのがわかった。しかし、女子学生では皆無であった（図3, 4）。

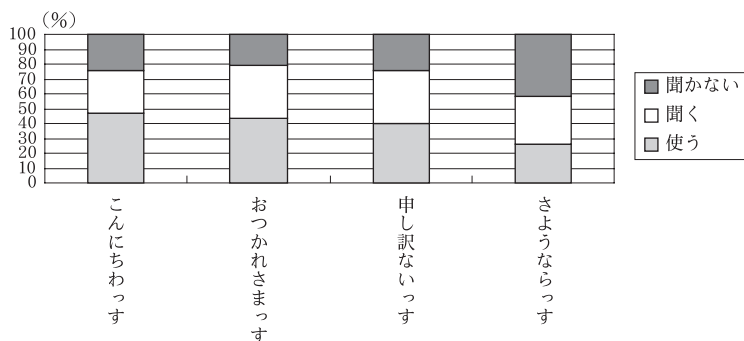


図3 男子学生「あいさつ+ス」

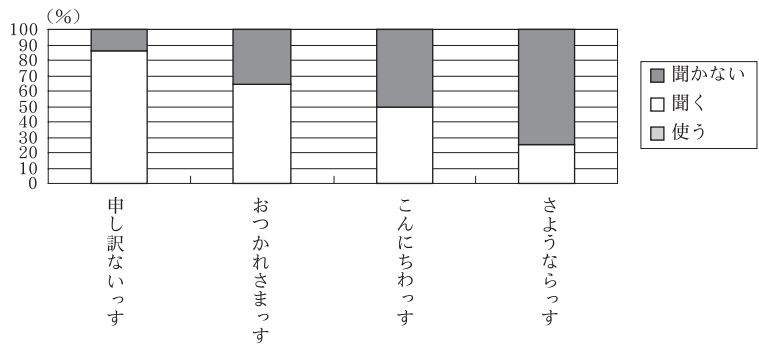


図4 女子学生「あいさつ+ス」

8.2 キャンパスあいさつ言葉調査から

キャンパスあいさつ調査の結果、あいさつの語尾に「ス」を付ける例がいくつも確認された。この中から、語尾が「ス」でも、「です」の縮約ではない「おす」や、その変形であろう「うす」「うっす」「うーす」「ういっす」等を除いた。その結果、「です」の縮約形「ス」の可能性のあるものが10グループ、22種、合計33例⁽¹⁴⁾になった。それを「ス」の前の語の形によってA、Bの2つのタイプに分けた。

1) タイプA (7グループ20種20例)

接続する前の語が一般的なあいさつ言葉の形を残しているものを「A」とした。

例：おはようっす　こんにちわす　おつかれーす等

2) タイプB (3グループ3種13例)

前の部分と「ス」が一体化し、分けられなくなっているものを「B」とした。

例：ちよりっす　ちゅーす　ちーす等

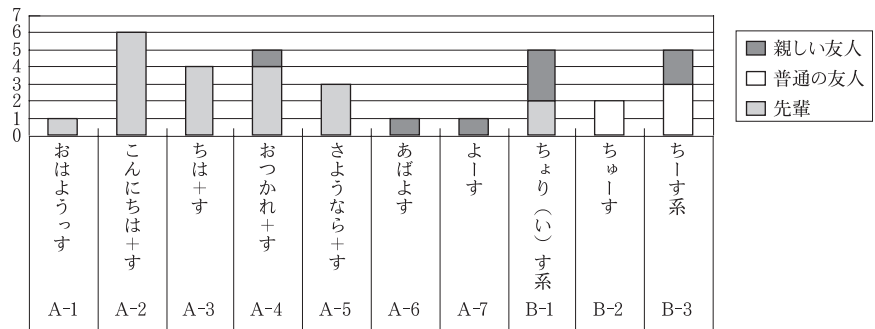


図5 「ス」のあいさつ対象別

(i) タイプ「A」の分析

このタイプは、「お疲れーす」「あばよす」「よーす」の3例を除き全てが先輩に対するあいさつになっている。「ちは」は「こんにちは」の略語であり、これを含めると「あばよす」以外は、ふだん「ス」なしで使われるごく一般的なあいさつ言葉である。先輩に対しては「おはようっす」「こんにちわっす」「さようならっす」といいながら、同じように敬意の対象である教師には「おはようございます」「こんにちは」「さようなら」を使う。なぜ、先輩にはわざわざ「ス」を付けるのか。

日本語のあいさつでは、敬意を表せるものと十分に表せないものがある。「おはようございます」「お疲れさま」「ありがとうございました」「申し訳ございません」などは、「おはよう」「お疲れ」などとは敬意の面で差がある。一方「さようなら」「こんにちは」は、たとえ3歳児であれ大学教授であれ同じあいさつであるため、敬意を十分に表しにくい。しかも、これらは「出会い」「別れ」を表すコードである以上のメッセージ性を伝えにくい性格を持つ。

また、あいさつというものは、人間関係の保持を目的としているため、たいていすれ違いざまのわずかな間に相手に好印象を与えなければならない。しかし、日本語の敬意を示すあいさつは前出のように長いものが多い。これが「おはようっす」になると、敬意が表せると同時に短くてすむ。「ス」の持つ仲間意識や敬意のメッセージも伝えることができる。教師には「仲間意識」のメッセージは必要ないが、先輩には敬意と共に伝えたい気持ちが働くと考えられる。

また、「あばよす」を例にとると、「あばよ」だと少々乱暴に聞こえるが、敬意を表す「ス」を付けることで、相手のことを邪険に思っているのではない気持ちと、ちょっとした遊び心（親しさを込めた気持ち）が相手に伝えることができる。

(ii) タイプ「B」の分析

「こんにちは」の省略形である「ちわ」に「ス」を付けた「ちわす」がさらに変化し「ちゅーす」になったと考えられる。これは、今回のデータでは2名のみが普通の友人に使うとしたが、90年代に大流行した「スラムダンク」⁽¹⁵⁾では、監督や先輩に対しても使っていた。これがさらに変化して「ちーす」になったものと考えられる。「ちーす」には「ちゅーす」にわずかに残っていた敬意がさらに薄まり、ここでも「普通の友人」だけではなく「親しい友人」に使うという例が見られる。

現在、その出自がわからないものが「ちょり（い）す」である。これは2008年の流行語で、女性タレント⁽¹⁶⁾が使っているようだが、彼女が作ったものかどうか不明である。ただ、興味深いのは普通の友人には「ちょりー」を、親しい友人には「ちょりーす」を使うとした回答者がいた。親しい友人に「ス」の付いたあいさつことばを使う傾向は、データにも現れており、普通の友人には5例なのに対し、親しい友人に使うとした例は8例と若干多い。

今回、対象に加えなかった「おす」「うす」「ういーす」等も、語末に「ス」を使うことから、その語源に関わりなく親しみが表せるあいさつと感じられているのではないか。

タイプBの分析により、挨拶に付ける「ス」には敬意表現からさらに変化し、若者たちがそれ

に親しさを表す機能を意識していることを示唆するものとなった。

9. ま と め

敬語を崩すことによって生まれた「ス」は、知性を隠す機能からネガティブポライトネスとポジティブポライトネスの両方の機能を併せ持つことになったと考えられる。これが40年以上を経て、運動部員以外の若者たちにも浸透し、さらに、テレビを通じて視聴者に語られるほど市民権を獲得した言い方となっている。しかし、アンケート調査から、女性の使用者は少なく、男言葉と一般的に認識されている。

ブログにおいては、口頭ではあまり使われない動詞接続が多用されている。これは、「ス」が品詞に関係なく接続できる「敬意と親しさを表す助動詞」に変化していることを表している。

また、あいさつ言葉に付けられた「ス」は、助動詞から接尾語へ変化している。さらに「ちゅーす」のように一語化してしまったものは、語末の「ス」から敬意の機能が薄れ、親しさを表す機能を担う「パーツ」と変化している。

謝 辞

聞き取り調査にご協力くださった方々、井上・倉持共同研究アンケートにご協力くださった方々、「あいさつ」調査回答者の中央学院大学法学部の皆さんに、心からの感謝をお伝えいたします。

〈注〉

- (1) 『フジ三太郎』での初出は1966年9月22日朝日新聞（夕刊）、『サザエさん』では1967年2月から翌年5月までの間、朝日新聞（朝刊）に掲載された（掲載日不明）。
- (2) 文書資料は、小説、コミックなど流行表現を反映しているものが中心である。聞き取り調査は、70代1人、60代1人、50代1人、40代1人の計4人（いずれも男性）である。ただし、60代の俳優へは、マネージャーを通じてのメールのやり取りのみで行った。
- (3) この「知性隠し」を裏付ける材料は、まだ十分とはいえない。今後はこれを作業仮説とし、アンケートなどで裏付けたいと考えている。
- (4) 『Politeness Some universals in language usage』pp.178-187のNegative politeness Strategy 5 “Give deference” に当たる。
- (5) (4)と同書pp.111-112のPositive politeness Strategy 4 “Use in-group identity markers”にある“Contraction and ellipsis”に通じる。「ス」は敬意表現のため、仲間内のマーカーと言い切ることにはできないが、本来の形を崩すことが許される親しみのマーカーにはなっている。
- (6) 井上史雄・倉持益子「若者新表現アンケート」。2008年6月から12月まで東日本の9つの大学の協力を得、同年12月現在集計中。この論文には、集計が終わった3校のデータのみ掲載した。
- (7) 協力大学3校は、東京23区内1校、千葉県湾岸部1校、同県内陸部1校でインフォーマット数94人、性別不明などで本稿のデータとして使用したのは男子57人、女子28人、計85人である。
- (8) 2008年8月11日、北島康介100m平泳ぎで優勝した直後、涙ぐみながらのインタビューで。
- (9) 同年8月13日、松田丈志200mバタフライ決勝で3位に決まったときのインタビュー。
- (10) 同年8月15日、石井慧柔道100kg超級で優勝した直後のインタビューで。
- (11) 2008年9月17日放送『開局45周年記念番組速水もこみちが世界のピラミッドに登る!』テレビ東京。

- (12) 秋葉洪之助ブログ『パリパリの PARIS (パリっす) 4 日目』より (引用・参考資料参照)。
- (13) 中央学院大学法学部 1 年生から 4 年生の男子 53 名, 女子 2 名を対象とし, 2008 年 4 月実施した。回答形式は使う場面ごとに, よく使うあいさつを自由に書き入れてもらうものである。
- (14) 語源が同じで形の違いもわずかなもの (レーベンシュタイン距離で 3 以下) を同じ「グループ」, 音声上の違いを持つものを「種」として数えた。例えば, 「ちわっす」「ちわす」「ちわーす」は, 「ちわ(は) + す」という同じグループに属すが, 「種」としては, 「3 種」である。また, 「例」とは, 集計に表れた数で, 「延べ語数」に当たる。
- (15) 『SLAM DUNK』井上雄彦作のバスケットボール漫画で, 1990 年から 1996 年まで週刊少年ジャンプに連載され, 後にアニメ化もされた。単行本の発行部数約 1 億 2000 万部 (2007 年)。
- (16) タレントの木下優樹菜がバラエティ番組で使う, 出会った時のあいさつ言葉である。

引用・参考資料

『秋葉洪之助の今日も行き当たりばったりっす! パリパリの PARIS (パリっす) 4 日目』1999-2001 の旅行記 <http://www.ricewine.f2s.com/pages/akiba/pages/10.htm> 2008 年 12 月 9 日掲載文再確認
 サトウサンペイ (1974) 『フジ三太郎』1~4 巻, 朝日ソノラマ
 長谷川町子 (1997) 『長谷川町子全集』1~18 巻, 朝日出版社, 第 18 巻 p. 207・p. 264

参考文献

尾崎喜光 (2002) 「新しい丁寧語「(っ)す」『男性のことば・職場編』現代日本語研究会編, ひつじ書房, pp. 89-98
 中村桃子 (2007) 「新しい「男ことば」の登場——「です・ます」から「ス」へ」『〈性〉と日本語ことばがつくる男と女』NHKBOOKS, 日本放送出版協会刊, pp. 59-73
 Brown & Levinson (1987) “Politeness Some universals in language usage” Cambridge